

今のうちになんちちゃんとい訊いておかんとね

大阪言葉からひもとく「つながり方」

2030年には、日本の人口の3割が高齢者となる超高齢社会が到来する。すでに社会保障、医療、就労人口など、さまざまな問題が顕在化するなかで、地域や組織では、社会の変容とともに世代間の断絶が進んでいる。大阪・空堀に暮らし、2017年には明治期の長屋を改装し「大阪芸術劇場」を開設。児童文学作家として、「言葉」を通してさまざまな問題提起を行っている藤田富美恵氏に、世代間断絶により失われてしまったものが何なのかを提言していただく。そこから見えてくる、今後私たちが残すべきものは何か、そのためにはすべきこととは？

加藤しのぶ 構成
宮村政徳 撮影

藤田富美恵

Fujita Fumie

インタビュー

「児童文学作家」

問題提起にあたって

「どうしたら走るのが楽しくなるやろ？」。足が遅く、運動会が憂鬱な小学2年生のトシ子は、地元に住むお年寄りで自分と同じ名前の子におばあちゃんに訊く。おばあちゃんが手渡したのは、チロリアンテープで飾った可愛い足袋のようなもの。おばあちゃんは、自分の祖母に同様の履物をつくってもらって、運動会に出たという。結局それはいても運動会ではビリだったけど、いつもと違って「もっともっと走りたいほど、楽しかった」というおばあちゃんの言葉に、いつしかトシ子も運動会が楽しみになる……

大阪言葉での何気ないやりとりが、同じように運動会が苦手な子どもたちの活力となるような作品『うんどう会にはトビックス！』（文化出版局刊）は、児童文学作家の藤田富美恵氏が実体験をベースに書いた作品だ。そこには、今は少なくなつた子どもとお年寄りの素朴で温かな交流が生きて描かれている。

路いとし・喜味こいしをはじめとする多くの上方漫才師を育てた、漫才作家の秋田實を父に持つ。藤田氏が童話を書きはじめたのは、父の他界後、自身の3人の子育てが少し落ち着いた40代からのことという。描くのは、嫁ぎ先である大阪の空堀のまちでの暮らしや路地に住まう人々とのふれあいである。

空堀地区は、「大阪の歴史の発祥」といわれる上町台地の西側に位置し、かつて大阪城の外堀があったときから、このことから、「からほり」の地名を持つ歴史ある地域である。明治期には水質のよさを生かした晒蠟（あせろう）づくりで財をなした大店が何軒もあり、大正・昭和初期には界限に小説家の直木三十五、漫談家の花月亭九里丸や、洋画家の国枝金三らも住まった。近くの空堀商店街には若き日のエンタツ・アチャコが出演した寄席もあったという、大正時代の文化の中心を担った地でもある。奇跡的に大阪大空襲を逃れたこの地区は、ビルが立ち並ぶ大阪市街から一筋入っただけで、今なお大正時代の残り香を漂わせたまち並みが残されている。

藤田氏が嫁いだ先もかつて晒蠟を生業とした大店の一軒であり、明治期に職人が住まった長屋をそのまま残し、借家としていた。まだ大店の「ごりよんさん」の風を残した姑のもとで、店子に「若奥さん」と呼ばれた藤田氏の空堀での暮らしは、長い歴史を持つ土地特有の濃密な人間関係と、連綿と受け継がれてきた行事ごとの慣習が当たり前のように残つたものだった。その空堀の地に住んで五十年余となる藤田氏は、そうした日々の暮らしで見聞きした大阪の古き良き言葉や慣習が急速に失われていくことに、大いなる危機感を抱いているひとりである。

言葉とは、長い人の営みのなかで育まれた社会・生活習慣や価値観が込められた「意味」を持つものである。時代とともに新しく生まれる言葉と消えゆく言葉があるのは、理（ことわり）といえ、その変化があまりにも性急かつ劇的な現代にあつて、それらが持つ「本来の意味」までもが失われつつある。

藤田氏が持つ危機感は、本誌の今号のテーマである「世代間をつなぐ」というテーマに核の部分で通底する。

そこで巻頭では、藤田氏にご登場いただき、ご自身の空堀での暮らしを、なによりつつある美しい言葉と、その持つ意味に視点を据えて語っていただいた。懐古趣味や昔話にとどまらない穏やかな大阪言葉の語りから、加速した世代間断絶により何が失われ、何を残していくか、そのためには何をなすべきかが自ずと提示されよう。

「お早うお帰り」 気遣いから生まれる コミュニケーション

私が空堀に嫁いだのは、1964（昭和39）年。空堀は路地が多く、まるで迷路のようなまちです。嫁ぎ先はこのまちで江戸時代から蠟燭や鬘付け油の原料となる晒蠟をつくっていた家でした。すでに家業は廃業し、明治期の長屋は借家となつており、45軒の店子は何代も住んでる方がほとんど、お互いのことは何でも知つてる家族のような関係でした。

何せ今から50年以上前です。勝手口から一歩出ると、細い路地では夏は涼みに、冬はひなたぼっこをしている人がいて、すぐに「どちらへ」と訊かれる。最初は律儀に「百貨店



昭和30年頃、自宅にて執筆中の父・秋田實氏。50歳になっていたが精力的に仕事をしていた。



上・中央右／2017年に長屋を改装し開設された「大大阪芸術劇場」。
中央左上／敷地内には母屋や蔵などもそのまま残されており、古き良き時代の風情が感じられる。
中央左下・下／ワークショップなども行えるギャラリー「Drill & Drill (ドリル・ドリル)」も併設。
ご近所さんも手強い改装されたギャラリー内には、秋田實氏が主宰した雑誌『漫才』も飾られている。

まで」とか答えながら、ずっと見張られてるようで窮屈に感じてました。でも、訊いている方はさほど知りたかと思ってるのと違ったんですね。

細い路地ですれ違う時お互いに黙ってたら気まずい。自然とお互いに仲良う、気持ち良う暮らそうという気遣いが生まれてくる。でもそういうなかでちょっと情報を入れたりするんです。「どちらへ」「医者さんへ」「どこ悪いの?」「ちょっと

風邪気味で」とか。

空堀での暮らしはプライベートがないんです。お互い、全部知ってる。今はプライベートを大事にされてますが、実はプライベートがないというのもあり難いんです。今だと「お医者さんへ」と言われても、「どこ悪いの?」とかつかつかに訊けません。でも、そういうことも皆が知ったうえだと、次会った時に「あ、もう風邪治ったん?」となる。そういうふうな会話が弾んで、コミュニケー

ションがとれるんです。

今は言う人も少なくなりましたが、出かける時には「いってらっしゃい」とセツトのように「お早うお帰り」という言葉がつきましました。これも元気で帰ってきてくださいよという思いからの言葉で、「どちらへ」と同じように深い意味はないんですけどね。昔はスマホもないから、いったん外に出たらもう便りはできないわけですから無事な顔が見たいというので「お早うお帰り」。

相手への気遣いあつての言葉ですね。

私は今、三世同居をしています。息子には今も言います。車で出かける時、無事な顔を見るまで心配で。でも、高校2年生の孫には、「いってらっしゃい、お早うお帰り」と言っても、日によっては「そうはいかん」と返されますが(笑)。

「ついでにはあかん」と「歩き屋さん」人、家をつなぐ存在

店子とは家族のような関係でした

から、冠婚葬祭、たとえばうちに子どもが生まれたら、皆お祝いをくださる。そうすると、うちは内祝いに菓子子を誂えて風呂敷に包んで「この度は有り難うございました」とお礼に行くんですね。そうした時に姑が言っていたのが「ついでにはあかん」。たとえ近所でも、何かのついでにお礼に行くのは失礼、いったん家に戻って一軒ずつ準備して行くものや、と。それだけ時間のゆとりがあったこと、やはり相手への敬意の表れですね。

こうした挨拶の時には「歩き屋さん」という人がいて、各家を回ってくれました。昔はこの辺には大きい晒蠟屋さんが5軒あって、お正月に

はお互いの家に挨拶に行つたのですが、各家の床の間の掛軸の話題が重ならないように、「うちは今年は富士山」「そしたらうちは……」と各家の情報をつないで調整するのも「歩き屋さん」の仕事でした。「歩き屋さん」とは、使用人でもお友達でもなく、お互いに「したげよ」「お願いします」という関係だったんです。

「言葉は最初の出だし」家や地域におけるお年寄りの役割

私の住んでいる路地は、学校から帰って来た子どもたちの遊び場でした。鬼ごっこやかくれんぼで大騒ぎして走り回ってる子どもたちに対し

て、長屋の誰かが風邪で伏せてたら「病人がいるんやから止めとき」と注意したり、路地の外に出ようとすると子を危ないと止めたり、ボール遊びをして花にボールをぶつけて折つたら「まず謝りなさい」と教えたりするのは、全部お年寄りでした。当時母親はたいい家で内職をしていたから、子どもをかまわつてられへん。子どもを怒ったり論したりするのは、お年寄りの役目やったんです。

そういう時気をつけるのは言い方のうちの父が言うてたのは「言葉は最初の出だしや」。つまり「語気」ですよね。最初の出だしがきついとエスカレートする。そういう意味でも親よりお年寄りの方がいいんです。「あほやな」と言うのも、親が「あほやっ!」と言うのと、お年寄りが「あほやな」と言うのでは、受け止め方が違いますよね。

でも、今はそういうゆとりがないんです。ゆつくり考えて、教わってということがないんです。昔は知らないことは辞書で調べるか、お年寄りに訊いて教わっていましたが、今はパソコンで調べたらすぐにわかる。訊かなくてええわけです。手軽に知識が入るから、知識の有り難みがわからない。だから、年寄りの有り難み、存在感もわからなくなっているんです。

核家族化が進んでいることも、お

年寄りの役目を失わせていると思います。私が子どもの時は、遊んで遅く家に帰ったりすると親は鍵を閉めて、家から放りだしました。そういう時、おばあちゃんに「開けたりいな」と言われてししぶ開けるんですね。親はそう言われるとムツとしますけど、でもそれがないと開けれへんの。きっかけがいるんですね。核家族化でそうした、お年寄りが担ってきた潤滑油みたいなものもなくなつたと感じます。

「お互いさま」若い世代との関わり方

昔は知らないことはお年寄りに訊いて教わつた、と言つた通り、お年寄りはいろんなことを知っています。地藏盆などの習慣も、お供えを飾る台の組み立て方を教えたり、提灯にその年に生まれた子どもの名前を入れたり……いろいろ仕切ってくれるお年寄りがおりました。私は昔の人の話は百科事典よりも情報が豊富だと思っています。百科事典に書いてあるのは「説明」だけで、実際にこんな時に役に立ったというような「経験」は、お年寄りの頭の中にありますから。

ちなみにお年寄りは同じことを何度も言いますが、繰り返し喋ること、記憶を上書きしてるんです。だからお年寄りが同じことを言うのは





「Drill & Drill」はワークショップだけでなく気軽な集まりも多いので、老若男女問わず仲間が集える絶好の交流の場となっている。また、藤田氏による勉強会も定期的を実施されている。

いいことなんですよ。とはいえ、私も昔、姑がなんかうるさいこと言い出したらびやーとあっち行っちゃった。今ではしまったな、もっと聴いておいたらよかったと思うことが多いです。

本当に、私自身がこの歳になって、やっぱり年寄りの言うことは聴かなあかんというの、若い人が聴く耳もたんのも当たり前というの、どちらも今、やっと実感するようになってきました。だからこそ、お年寄りが若い人にちゃんとしてもらおうと思ったら、それなりの努力をせなあかんと思っています。

孫と暮らしながら、嫌がられんようにするにはどうすればいいか考えます。卑屈な意味ではなく、お互いにされて嫌なこと、私が子どもの

時にされて嫌だったことはせんようにしよう。今のうちに、お年寄りや日常的に接する機会がほとんどない時代、「お互いさま」という感覚は当たり前でなくなっています。歩み寄るのに大事なはこの「お互いさま」という気持ちですよ。

あとは、自分の弱みというか、現在の状況をきちんと伝えて、してほしいことを伝える。さっきの「お年寄りと同じこと何度も言う」も、私は「おばあちゃん、同じこと何べんも言うかもわからへんからね」と言っておくと、孫は「しゃーない、黙って聴いたげる」。恩に返して言うんですけど、私は笑顔で「おおきに」て言うときます(笑)。ほかにもパソコンのことや新しい言葉は孫に教えてもらったりして、自然にお互いに学んでいます。

「お蔭さまで」 ——高齢者がすべきこと

若い人とうまくやっていくにはお年寄りも努力をせなあかんと言いましたが、ほかにどうするか。今のお年寄り、することが多いですね。同世代の仲間内だけでカラオケだゲーボールだと忙しい。そういう世の中の仕組みもお年寄りの役目をなくしてしまっただけ一因かもしれません。私は、これからはお年寄りも何か特技や趣味を持ってそれを極めるの

がいいと思います。たとえば本が好きなら、作家の名前をたくさん言えるとか。お年寄りがちょっとした時に、知ってることやできることをぱっと見せたらすごい！と思われる。そういうものを磨いておくとい

私がお話を書きはじめたのは40代はじめでした。それまでは3人の子育てと家の中の仕事を手伝ってました。末っ子が学校にあがった1980年頃、ようやく少し手があき、周りを見たら生涯教育ということが言われていて、新聞を見たらかルチャーセンターの広告がのっている。「世の中の人、こないして勉強してはるんや」とすぐ後れをとった気がしました。では私は何をしようという時に、特技が何もなくて手芸は好きでしたが、それは子育ての間に全部したので、今度は材料費のかからんものをやろう、それにはモノを書くことやと思ったのです。

それまで書く経験のなかった私にとって俳句や短詩や小説は難しいもので、一番身近だったのは子どもに読み聞かせていた童話でした。それでカルチャーセンターに行ったんです。あの頃は、作品の公募もたくさんあったいい時代で、何回も応募して8回目で初めて入賞した時は本当に嬉しかった。主婦にとっても、自分だけの喜びってなかなかありません

私自身が残しておきたい経験は、「戦争が起これたらどうなるか」ということ。私は日中戦争開始の翌年に生まれ、その後太平洋戦争と、子ども時代はほとんど戦争の世の中で育ちましたが、その時の暮らしがどういうものであったか今のお母さんは知りません。そういうのを伝えていくのは、これからの私の役目だと思います。

「ほどほどに」 ——美しい大阪言葉の精神を次代に

私は大阪で生まれ育って、大阪しか知りませんが、大阪の曖昧さのあるところが大好きなんです。言葉もね、大阪言葉って「ほどほどに」とか「そこそこ」「どっこいどっこい」



上/昨年11月に行われた巴里祭では、段ボールで手作りされた巨大エッフェル塔がシンボルに。今年も7月に開催が予定されている。

下/昨年は、元大学落研の素人落語や身体障がい者グループ「いるかバンド」による演奏のほか、近所に住む「ちんどん通信社」の皆さんなどが演者となり「俄」も再現された。



藤田富美恵
ふじた ふみえ
1938年、大阪府生まれ。父親は「近代漫才の父」と謳われた秋田實氏。1988年「うんどう会」にはトビックス！で、第8回カネボウ・ミセス童話大賞受賞。秋田實の追想記『父の背中』で、1989年第8回賞・ノンフィクション部門受賞。1994年「秋田實賞」受賞。そのほか「からほり亭で漫才」「子ども落語家りんりん亭りん吉」ともに文研出版、『秋田實 笑いの変遷』（中央公論新社）など著書多数。

これからも「ほどほどに」大阪言葉を潤滑油としてやんわりとした言葉でストレートにいかないように。そして「お互いさま」の気持ちを保持してほしいなと思います。

でしたから。童話の題材にしたのは空堀でのことです。ここしか知らないから、空堀を舞台にお年寄りと子どものふれあいの話をずっと書いてきました。

生徒としてちょうど10年経った頃、先生が辞めることになったので、私が講師になり、今年の3月に辞めるまで30年続けました。今はこの場所で、気心の知れた仲間4人と400字ぐらいの作品を書いて見せあっています。添削ではなく、皆で読んで「ここどうしたらええと思う？」、「ここはちょっと足らんやないの」とか話しながら遊んでいきます。書いた文章は、新聞各社の読者投稿欄などに出すんですが、掲載されたら謝礼としてお金や図書カードがもらえる。それを孫にあげると「おばあちゃん、えらいね」ってほめられて。孫からすごいと言われるので励みになるんですよ。

だから特技といっても、別に先生にならなくてええんです。これやったら私に任せといて、といえるものがあればいいと思います。私はこれからの老後は——というと、子どもにはもうとっくに老後やろと笑われますけど——執筆活動に集中したいと思っています。ひとつは「俄」についての小説。俄とは、享保の頃の夏祭りに始まった即興芝居のことです。父が残した資料に俄

みたいに、同じこと2回言うんですよ。そういう言葉が好きです。語気もやんわりと、全体に締まりがない。そういうところがいい。これも父から聴いたことですが、昔船場では「稚さんが何か失敗したのを怒る時に、「なんであんたみたいな賢い子が、こんなあほなことするねん」とやんわり言う、と。「あんたみたいな賢い子が」と最初につけることで、「あほな」という言葉がきつくな聞こえないんですね。そう言われると「稚さんも」「すんまへん、うっかりしてました」、怒った方も「うっかりせんと、しっかりしや」となる。

「大阪では言葉でトラブルをええほうにもっていきけるんや」と言っていました。

これからも「ほどほどに」大阪言葉を潤滑油としてやんわりとした言葉でストレートにいかないように。そして「お互いさま」の気持ちを保持してほしいなと思います。

大阪藝術劇場」を開設しました。昨年に続き今年もそこで巴里祭を計画しているのですが(笑)、劇場の前の路地はちょっと広いので、そこに舞台をつくって実際に俄芝居もやる予定です。お年寄りのこれからの役目をもうひとつ。自分が知ってること、どんなことでもいいので書いて残しておくといい。どこの家にも歴史はあって、絶えず先祖のお蔭で今があるわけです。自分の家の親戚関係とか、案外皆知らないですから、今知ってることを書いていたら、いなくなっただけから役に立つと思うんです。少しずつ書いていくことで、「明日はあれの続きを書こう」という生きがいにもなると思います。

の資料もたくさんあります。父は自分が漫才の仕事ができたのは漫才師がいたからであり、さらにその元となる俄の人へも尊敬があつて、調べていたのだと思います。今は漫才師になるのも養成学校があり、自分でお金を出しているから誰それのお蔭という感覚はないし、落語や、漫才、喜劇の元が俄ということはどうでもええことなんですけれども、やっぱりそこがないと。父が「お蔭さまで」という思いで大事にしたものを記録として書きたいと思っています。